シリーズ
成田市50年

①成田市の誕生と旅立ち

昭和29年3月31日に誕生した成田市は、来年、市制施行50周年を迎えます。そこで本号から、本市が歩んできた50年にわたる歴史を、写真や資料で振り返る「シリーズ成田市50年」を掲載します。

旧成田町を中心に7カ町村が合併

合併の準備を進めた事務局と資料作成のバックアップをした県職員。前列中央は石原貞三初代成田市長（「市政20年の歩み」より）

合併前夜の動向

戦後の町村合併は、全国的には昭和28年の町村合併促進法により推進されましたが、千葉県ではひと足先に動き出していました。

昭和27年当時、合併は、成田町・公津村・八生村・中郷村・久住村・豊住村・遠山村・富里村・安食町（現栄町）の成田警察署管内の2町7カ村で進めるのが最適だと考えられていました。しかし、富里村は県から、人口・財政ともに適正であるため合併の必要はないと見なされ、また、安食町は政治的な事情で参加せず、この合併案は幻と終わりました。

翌28年8月、成田町、遠山村、中郷村、公津村、八生村の5カ町村で「町村合併参考資料」が作成され、11月には中郷村、久住村、豊住村、八生村、公津村の村長や議長らが町村合併について意見交換し、原則として成田町を中心とした合併に異論がないことを確認しました。

順調に進むかに見えた合併事業でしたが、御料牧場をもち財政力豊かな遠山村の一部がこの合併に反対、豊住村興津地区では安食町への合併を希望するなど混乱が見られました。しかし、反対運動は大勢とはならず、遠山村、豊住村（興津地区は合併後安食町へ編入）は合併賛成でまとまり、ここに7カ町村合併の原型ができました。

合併事務局の設置

昭和29年1月14日、7カ町村合併促進委員会で、合併協議会規約と事務局設置が承認されると、合併事業は急速な進展を見せ始めました。「合併基本要綱」が作成され、内容は、①対等合併、②新市名は成田市、③合併時期は昭和29年4月1日とするなどでした。

当時、合併事務局で最年少だった磯岡利男さん（八生村・現特別養護老人ホーム玲光苑長）は、「議会資料や県に提出する合併申請書の作成は、連日泊り込みの作業でした。書類の作成は鉄筆で謄写版印刷、複写はカーボン紙の時代でした。それで一つの資料を約300部作りました。新市成立後の5カ年計画は、各町村から事業計画を出し合いながらの仕事でした。

渡辺薫さん（成田町・故人）を中心にみんなで励まし合いながら進めました。ともかく無我夢中でした。何としても新しい成田市をつくるという使命感があったからこそ達成できたのだと思います」と当時を振り返ってくれました。合併を裏方で支えた7人は、後に『七人の侍』と呼ばれました。

昭和29年2月18日、最後の合併協議会の出席簿

成田市の誕生

合併は、当初昭和29年4月1日に行われるはずでしたが、急きょ1日早まりました。理由は、28年度分の特別地方交付税や合併補助金を受けるためでした。最後の合併協議会では、各町村議会に提出する「7カ町村合併に関する議案」が満場一致で可決され、3月31日、県下11番目の市として、人口4万4、724人の新生成田市が産声をあげました。

観光と農業のまちを目指して

石原貞三市政がスタート

合併直後に行われた市長選挙では石原貞三氏が当選。石原市長は「成田市は観光と農業を生命といたします」（『成田市政だより』昭和29年5月1日）と所信表明し、新生成田市の第一歩を踏み出しました。

「新市5カ年計画」に基づく旧町村からの引き継ぎ事業である市営住宅の建設、失業対策、小中学校の増改築・新築工事などの着手と新勝寺、宗吾霊堂、三里塚御料牧場などへの観光客誘致計画などを実施しました。また、「住みよい成田をつくろう」を合言葉に新生活運動を展開し、福祉施設では成田地区婦人会の協力で、初の保育園が開設されました。

新生活運動。エンジンダスターで消毒作業（昭和30年６月）

観光の町成田を「音頭」で宣伝（昭和31年）

寺台の永興（ようこう）寺内に開設された成田保育園（昭和30年）

盛大に市制施行祝賀行事

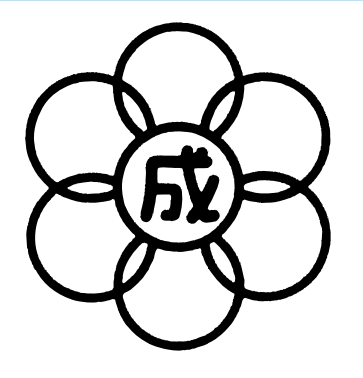
成田祇園祭に合わせて行われた祝賀行事（昭和29年7月6日～10日）は、成田市の前途を音と光によって祝福したものでした。

成田小学校の講堂では市制施行祝賀式が行われ、成田駅周辺では提灯（ちょうちん）行列、小唄勝太郎一行特別出演、仮装行列など多彩な催し物で大変にぎわいました。当時の広報紙には、提灯を持って成田駅前に押し寄せた市民を、「火の海と化した提灯行列」（『成田市政だより』昭和29年8月10日）と伝えています。

成田市制施行を祝う提灯行列（昭和29年7月6日）

成田市の市章

今も図書館に残る５０年前の図案



市制施行まもない昭和29年5月7日に制定された市章。中央の輪は成田町で周囲に重なっている6輪は6カ村を表し、１町６カ村の大同団結を意味しています。左の図案は、宗吾の吉岡寛さんの作品で、一般公募で集まった97点の作品の中から選ばれたものです。

この50年前の図案が、今も市立図書館に大切に保存されていました。残念ながら1～3等に入選した作品はありませんでしたが、残された作品の中には丁寧に彩色を施したもの、デザインの意味や思いを書き記した作品などがあり大変興味深いものばかりです。7カ町村の人々が当時の成田をどんなイメージで見ていたのか、また、新生成田市に抱いた願望や愛情が感じられます。

①剣は信仰、桜の花びらは観光、さざ波は印旛沼を表す。宗教観光都市成田をイメージしたものです。

②成田の「リ」の字を7つ組み合わせ相互の発展と観光を花に、中央の田が田園都市、外輪は人の和を表しています。

③１町6カ村が手と手を取り合う様を成田の「ナ」の字で組み合わせたもの。また、平和の象徴である鳩（はと）の羽でもあり平和な市になってほしいという願いが込められています。

①

②

③